

追い込まれ、戦傷癒たるも祖国日本に復員して皆々様に面倒見ていただき今日生きるのは、神仏と靖国の英霊が守って下されたことと心から感謝して合掌する。私は朝夕、当山眞泉院にて各祖霊と戦地時代の英霊とソ連捕虜時代埋葬した聖霊には毎日法要しております。特別位牌を作っておまつりしています。

今日は世相は変わり、私も老年八十八歳になりましたが、日本国民に昔のような世相はなくなりました。

敗戦前の日本の美徳はなくなり、私から見ると日本はどうなるのでしょうかと考えます。いかに世の中は進歩しても、地球上の人間は正義を守って、靖国の英霊、神仏に報恩感謝を忘れてはならないと私は思います。私は復員するまでは戦死となっており、一切の戸籍ままで戦死となっておりましたので、手続きして復活しました。私の兄弟は海軍で戦死しておりました。

今日、復員以来、戦傷後遺症で国立東京第二病院に月二回、外来で治療を受けておりますが、平成五年十一月二十六日戦傷後遺症に倒れたのです。過去入院した国立東京第二病院でないと治療と薬はないソ連捕虜

特殊病です。私も後いくばくもない生命と自覚しております。第二次世界大戦に出動して戦地はわずかでしたが、常に数十名の英霊法要、またソ連国抑留中は中央アジア共和国その他四国、シベリア北極ソスカ州で数千名の英霊を埋葬、法要しました。私は小さな寺院ですが、各聖霊をまつり朝夕供養しておる者でございます。

## 捕虜生活から心に決めたこと

福島県 大和田 正友

### \*召集令状がくる。

昭和十九年九月、召集令状がきたときのことを思い出す。青年学校の生徒を引率して軍事教練の指導員とともに、学校から十キロメートルばかりのところにある休石温泉を基地に演習に行っていた。小学校教師の若い同僚七海義定君が白転車で宿の坂道を登ってくる。「僕にきたな」とパツと予感が走った。そのとおりで

あった。

九月二十日の白幡神社の秋祭りを済ませ、翌二十一日、万歳松まで多くの人に見送られ、相模原の通信八八部隊に入隊することになったが、当時の相模原は旅館もない片田舎、近くの町田の旅館に一泊して二十二日、入隊したのである。

「俺もお国に奉公できるか」教壇で尽忠報国の大切さを話していた僕にとって、実戦の時が来たと安堵の心で満ちていた。

ここは満州に行く応召兵を集合させる部隊で、一週間ばかり輸送のための集団訓練が終わると出発した。新妻が面会に来たときは僕が出発した後で、涙の中、帰宅するほかなかった。

服装は軍人だが、武器は持たない丸腰の軍人であった。秘密の部隊移動であり、夜の玄界灘を渡り、朝鮮の風景を見ながら、満州に向けて北上を続ける列車の旅である。思い出の記録など紛失、記憶も忘却の彼方に去って、年月日、人名、地名など定かでないところが多い。

赤いトウガラシをつり下げた農村風景、列車の中は郷土の自慢話や家族の思い出など話し合いながら、友情を深めつつ満州国に入ったのです。鴨緑江の大きな流れに感心しながら、いよいよ異国の旅かと好奇心に駆り立てられたが、思い出に残るものは四平街で、補給のため列車はしばらく停車していたが、こんな田舎町まで広大な平原が続く広いなあとか、ハルビンの異国風とか、北安の不毛の原野とか、おぼろな記憶の追想のうち、原隊である黒河省孫吳そんぐにある第四軍第八通信隊に到着。第三大隊に所属したのは十月の中旬であった。

#### \* 満州孫吳の軍通信部隊の生活

入営した兵舎は丙号のランクで、戦地に準ずる設備でバラック兵舎であった。逐次改善の予定か、本部はレンガ二階造りで、当時としては最新の設備であったが、我々の兵舎は木造平屋のバラック造りで、建物の周囲を掘り、その土を兵舎の外周に積み上げて保温を図っている有様で、窓は天井の直下に、高さ三尺・幅一間の小窓が一間おきについたもので、室内は薄暗く

中央は通路になっており、レンガ積みめのペチカが両端の入口近くにあり、通路の両側は一人前一畳にも満たない場所が各自の休み場所である。枕元に銃を立て、その上に棚があり、棚には手箱と六枚の毛布がきちんと整頓し、前や脇が一直線になるように、手箱の蓋でたたいたものです。その整頓が悪いと毛布が当たり、一面に乱雑この上なく放り出されてしまい、演習が終わって内務班に入るとこの有様、食事を上げてくるまでに整頓のやり直しである。のんきに休んでいる暇ありません。

靴や服は、体に合わせて配給されるのではなく、体を靴や服に合わせて履きなし着こなせと言うのです。無茶だと思っても仕方がありません。程度は中位でした。銃も各人に支給になり、酒、タバコ、菓子、果物の配給も十分でした。

酒を飲み、ペチカでリングやニンジンを焼いて食べるのが楽しみの一つでした。何といっても北滿は初めて経験する寒さです。零下三〇度を超す寒さ。室内が八度に下がると枕元が凍り始めるのです。ペチカを燃

やし続けなければなりません。粉炭では火力が上がリません。私は当番になると、石炭置場の小山に駆け登り駆け下りを三回も繰り返すと、塊炭が転げ落ちてきます。それをかき集めて持ってくる火力がつき、暖かい部屋になります。そのペチカの脇に寝ているのが助教の占参兵です。「大和田、よくやるな」、お陰で占参兵にシメられたことはありません。下士官卒の当番になりました。朝の点呼も出なくてよい日が多いのです。

ペチカの塊炭取りも思うようではありません。粉炭を焚くしありません。炊事場の薪を二本も失敬して、その上に粉炭を入れて燃やすとちようどよいのです。炊事の当番に、現行犯で捕まりました。「おい、何隊だ」「三大隊であります」「よし、薪を置いてさっさと帰れ」一目散に帰り事情を報告しました。見つけたのが第三大隊の兵隊だったのです。「大和田、無理しんなよ」で終わりでした。軍隊は連隊です。ちよつと運が悪いと大変なことになります。

シラミには苦しめられました。下着の縫い目にぎつ

しりたかるのです。煮るくらいでは卵が死にません。

一番は、洗濯をして零下三〇度もある外に干して凍らせるのです。だが、それはできません。そんなことをすれば八まわすVと言って、盗難に遭ってしまうのです。シラミ駆除はソ連が一步進んでいました。

寒さと言えば、朝の銃剣術の練習が終わって室内に入るときは相手の鼻を見合って、鼻が八白く透明に近くなっていないかVと確認し合ってから入室するので。凍傷にかかっていたら、鼻に血が通い痛みを感じるまで鼻を軽くたたき、凍傷の心配がなくなってから入室するのです。夜の点呼も凍傷になったかどうか、週番士官に点検されます。鼻の頭が黒く火傷したようになるので一目瞭然、隠すことはできません。これは本人の自覚次第です。

寒さの経験は限りありません。冬の浴場当番も難儀の一つです。室内の井戸穴がこぼした水で凍り、上から一メートルくらいのところの穴が小さくなり、その上綱が凍り、滑車が回りづらくなり、湯をかけかけ綱の水を溶かして水を汲み上げるのです。小屋として食

事や飲み物などが出て魅力のある使役でしたが、体力のない僕には辛い仕事でした。

有線の通信兵は十四キログラムもある通信の電線を巻いた器具を二人で担ぎ、配線したり、撤収したりします。撤収はだんだん重くなり、車を回す力も加わり肩が痛くて容易ではありません。それが、競争ともなれば、途中で尿でも出たくなったりすると大変、股のボタンをはめている暇もありません。寒さのためにアノ大切な局部を凍傷にでもしたら大変なことになります。便所の大便が槍のように上に出てきます。それを鉄棒で壊す使役になるとこれまた大変、糞の氷片が衣服について、部屋に入ると異臭を放ちます。オメガマ戴くもとです。

#### \* 甲種幹部候補生

こんな経験をしているうちに、幹部候補生を志願、テストに合格、集合教育が始まりました。星型の座金をつけた上等兵です。このころが古参兵に気合をかけられる一番辛いときです。食事当番で食缶を返納に行くと、あら拾いにきゅうきゅうとしています。炊事当

番兵は進級など度外視している人が多いのです。一年もたてば悪くて伍長、甲幹にでもなれば見習士官だ、今のうちに気合をかけておけばかり、意地悪く当たります。炊事場は湯気がもうもうとして相手がよくわかりません。ことに眼鏡をかけては曇って一層わかりにくいのです。ここでは気合をかけられました。

教官の見習士官が自分の日誌を読んで「大和田、こんな女々しいことでどうする」とのお叱りである。その日誌の一節にはこう記してあった。「雁が渡る、我が思いを伝えてほしい」、それは、母の手紙に「正男が少年航空兵を志願すると言ったきかない。何とか思いとどまるよう手紙をくれ」とあったのである。三人の男の兄弟のうち、長男の自分と次男の正宣も応召し入営中、三男の正男だけは残しておきたい一心からの手紙であることはわかりきっているが、「やめろ」と忠告の手紙は書けない。「母に心配かけないで頑張れ」と書くしかない。その思いを日誌にしたためてあったのです。

俺は決して女々しくない。悔しさのあまり営庭の端

にある電信神社の大前に直立して、軍人勅諭を一心に声高らかに唱えていたのです。終わったとき肩をたたかれ「これ、候補生、どうしたのだ」、過番士官だったのです。「教官殿にこれこれで女々しいと言われたので心外です。御神前に決してそうではありませんとお約束に軍人勅諭を奉読しました」。その週番士官は間もなく部隊の内地移動で水戸に移る前にわざわざ僕を呼んで、「部下思いのよい士官になれよ」と声をかけてくれました。この一言に「生命の尊厳」を教えられた気がして、よい士官になろうと心掛けたのです。こうした出会いがその人の一生を左右する恐ろしさを感得したのです。

甲種幹部候補生に合格し、北滿の寒さも経験した僕は、四月のある日、真新しい軍装で思い出多い孫呉を出発することになったのです。隊長の訓示を受け、上官、戦友に別れ、入営のため北上した同じ鉄道線路を南下して、奉天の北陵にある通称五四部隊にある予備士官学校へ第十三期関東通信幹部候補生として入隊しました。

### \*奉天での通信幹部候補生教育の様子

教育隊の隊長は天沼大佐、中隊長は高田大尉、直接の教官は奥村少尉であった。候補生は満州全域の軍通信、部隊通信、歩兵通信等が集められた。それを有線部隊と無線部隊とに分けられて教育された。

全員の集合教育の時間、講堂に集められた高田大尉の「日本神話」の講義が二十分ほど行われた後、突然「この続きをやる者はいないか？」挙手した自分は「ハイ」とその意志を示すと「よし、続きを」とのことで、僕は壇上の人となり、神話の続きを話し、「日本神話は皇室の尊厳、国体の本義を示しており、物心一如の生き方を示しています」と結び降壇したの思ひ出深い経験でした。

### \*有線第三小隊の教育

長身の奥村少尉は朝早くから営外に出て駆け足、軍刀を腰に颯爽と先頭切って走ります。通信兵といえども戦場では持久力と機敏な動作が要求されます。率先垂範の教育にはただこれに従うのみです。これこそ将校の心得の第一です。過酷に近い訓練に体重も減

少し、四十六キログラムになってしまった。通信将校というよりは、切込みの小隊長、対戦車爆破の指揮要員としての訓練を受けていた気もするのであった。

僕の通信能力は低く、送受信も最低で合格する有様おぼつかない将校の卵であった。ただ暗号の解説が優秀であったのが、せめてもの慰めであった。その卵にも見習士官としての軍装準備の説明があり、必要経費の送金と家伝の名刀？の送付を実家に連絡したときは何か任官の夢が膨らんできたが、その経費は残してきただ自分の貯金では間に合わず、父の苦勞も大変とちよつと寂しくなるのでした。復員して当時の事情を知ったのでは、郵便局では満州へ刀を送る受付も送金の受付もできないとのことで、あちこち手を尽くしたがダメであった。父は八せつかくの任官もできないのでは、とこえって心配していたとのこと、親の心子知らずで、感謝するのみでした。

### \*ソ連の侵攻

八月十五日の玉音放送を聞いたのは、奉天の教育隊の内務班であった。雑音が多くて聞き取れない。「堪

え難きを堪え、忍び難きを忍び……」と続く放送は降伏であった。

ソ連の大型航空機が兵舎の上を飛び越えて空港に着き、軍司令部の動員計画書が押さえられたので、現地除隊した人々も、員数確保のため再び入隊するほかにというような風評がささやかれるなか、我々の部隊は郊外に野営することになった。墓地の近くの幕舎生活が約一週間くらい続いた。食糧も十分にあって、体重も入隊当時に戻り体の自信もついたころ帰隊命令が出て、また北陵の部隊に引き揚げてきたのです。

武装解除の記憶は定かではありません。兵舎からはその後一步も外へ出ないので、外部の様子はわからない。他の部隊も続々集合してきて慌ただしくなってきたが、テントを利用してリュックサックをつくり、できるだけ多くの品物を詰め込んで、帰国の夢を膨らませていた。しかし、一日ごとにソ連に連れて行かれて強制労働をさせられるという民間情報が入ってくるようになってた。

## \*ソ連への旅

戦友の話では、部隊の兵舎を出たのは九月十四日であるという。

重いリュックサックを背負い、武装解除した候補生の隊列は駅に徒歩で向かった。小隊長格の僕には将校カバンが渡されたが、満人の少年が鋭利な刃物でつり革を切ってカバンを持ち去ってしまった。沿道は従順で無気力とばかり思っていた彼らが、今は打って変わって我々日本兵を侮辱した眼差しで見つめ、中には唾を吐きかける者もいて、カバンを切り取った少年を咎めようもない素早さである。敗戦の悲しみを味わった最初の一コマでした。

「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び……」このことかと、歯を食いしばり耐えるほかありません。

集合教育のため四月に南下した満鉄を北上するので、感無量です。原隊の孫兵は弾薬庫や飛行場があり、ソ連軍の戦車の蹂躪や爆撃に遭い、部隊に残った乙幹の人たちは全滅したとの噂でした。運命の不思議さを感じました。

九月二十六日には満州の北端の地へ黒河に到着。

奉天を出発以来十二日目のことです。それでもシベリア鉄道を東にウラジオストクからの帰国の夢はまだ残っていたのです。あの大きなリュックサックの中の物資も交換のために少しは減りましたが、黒河に着いたときにはまだ十分の荷物が残っていました。黒河の幕舎には何日暮らしたのか記憶は定かではありませんが、戦友の話では、対岸のブラゴエシチェンスクに上陸したのは十月四日とのこと。黒河の滞在は九日間になります。川岸には薄氷が張り、ソ連が満州の各地から運んできた物資、大豆、コウリヤン、米、衣服、機械類、ありとあらゆる物資が集積され、船の両側に推進用の水車がついた船でソ連領にピストン輸送されていた。鮭が豊富に採れて、切り身やスジコが川岸の臨時の店で売られ、物々交換で食べたアノ味は今でも忘れられません。

ソ連領で最初に上陸したこの街は平屋か二階建てで、レンガ造りで、二重窓には花の鉢が並べられ、風情のあるものでした。物々交換に婦人たちが近寄ってくるところを見ると、我々より先にたくさんさんの日本兵がこ

こを渡って、この町を通過したんだなあと想像されます。特に石鹼や毛布を欲しがっていた。

我々を乗せた汽車は貨物列車で、中央に荷物を出し入れするドアがあり、中を二段にし、雑魚寝です。六、七十名を一両に詰め込み、中央部に直接流れる臨時の便器がつけてあるが、主に小使用で、大便是夜に列車がとまると線路わきですが、ちょうどそのときソ連婦人が列車の車両に油差しにくるのに遭遇すると、お尻を蹴られます。用便も大変です。捕虜の宿舎の便所にさえドアがありません。長い板に丸い穴があり、そこにお尻を当てて用を足します。外人の捕虜の一人は大きく、我々は余りに小さく恥じ入るばかりです。列車は一路西へ西へと走り続けており、帰国の夢は百パーセント挫かれたのです。列車の旅が一週間も過ぎたころ、大きな湖岸を走り「あー海だ、日本に帰れる」と言う者が出るくらい、湖畔の旅が朝から夕方までです。

イルクーツクに着いた。大きな駅で、ここで初めて入浴のために臨時の下車です。入浴といってもシャワ

入浴です。一度に何百人も使用できるシャワーがあり、三回お湯が五分おきくらいに出て、その間に体を洗うのです。これで入浴は終わりです。

ソ連で感心したのはシラミ退治がうまくことです。

その方法は、入浴する前に体に着けた衣類全部をハンガーに下げて、それをへむろVに入れ、一時間も百度の温度で空蒸しをします。シラミは全滅です。兵隊のときのシラミでの苦労を思い出し、感心したり、苦笑したり。とにかくソ連では、シラミには神経をとがらせて対処していました。シラミは伝染病の根源だからです。

#### \* 罪人列車に会う

我々が乗ったのと同じ型の貨物列車が東へ東へ向かってくるのです。カラではありません。男と女が同じくらいの人数乗車しており、警戒は我々のより厳重です。ちよつとしたことで罪人にされた人々、特に労働を嫌った人々だという噂です。シベリアの開拓に送られ、罪の任期が終われば、現地永住させるためにも男女同数に近い罪人が必要なんだという。僕には真偽を

確かめる術のないことです。

シベリアのタイガ（森林地帯）を通る列車から見る過疎の状態は想像を超えるものです。五十キロメートルくらい離れて小さい村が点在し、半日も列車が走った所に町があり、こんな寂しいところの開拓は容易なものでない。ソ連の弱さと強さはここに原因しているように思われる。

我々の列車にソ連の将校と思われる軍人が乗り込み、ピストルを乱射し威嚇しながら物品を強要する。まるで泥棒だ。「この野郎、気安いぞ」それぞれ「チャースイ（時計）、オーチン ハラシヨ（大変よい）」こんな会話にあるとおり、時計が欲しくてたまらない。見習士官は「この恩賜の時計だけはどんなことがあっても渡せない」とリュックサックの底に隠していた。万年筆は喜ばない。ドイツ戦線で万年筆型の爆弾が、書いた途端に破裂した苦い経験があるからだと言う。

#### \* 抑留地の生活

カラガンダに到着したのは十月二十一日である。十八日間の長い列車の旅であった。第六収容所の一夜に

待っていたのは、南京虫の襲撃であつた。天井をはつてきた南京虫は人の真上に来るとパツと落下して、ものすごい痛さで血を吸うのだ。刺された跡には二点の傷がつく。イタリア人やルーマニア人が帰国した後、血に飢えていた南京虫は遠慮会釈なく攻撃してくる。防ぐのには皮膚を出さないことである。手にも靴下、顔や頭には袋を被るしかない。昼は木の割れ目深く入って隠れていて、退治が困難なしろものである。

収容所は高さ二メートル五十くらいの塀に囲まれ、その前後四メートルのところに鉄条網が張られており、それに近寄ると望楼の見張り台の警備兵の注意を受ける。逃亡したところで砂漠の中の炭坑町、逃げ通せるものでない。冬など塀に雪の吹きだまりができて、逃亡者は成功したかに見えましたが、零下六〇度にもなる夜の温度、凍傷になり足を切断する羽目になった人もいます。

#### \* 炭坑での労働時間

実働八時間、三組に分かれ、炭坑は二十四時間休みなしにどの組かは働いていることになります。一組は

午前八時から、二組は十六時から、三組は午前零時から労働です。組は月ごとに順次交代ですが、食事の時間も不規則になり大変です。

収容所から炭坑までの引率は兵隊です。五列に並べ十・十五・二十と数えて、兵隊四人が数えた数が一致しないと出発できない。これがなかなか一致しない。寒い夜など苛立つばかりです。「まったく頭が悪いんだから」つい不平が出ます。

私物検査がときどきあり、あるとき枕元からパンが次から次とゴロゴロ出てきた。今まで一キログラムのパンが七百グラムに減量されてしまった。日本人は体格が貧弱で食べ切れない、これでは衛生上も悪いと減量されたのである。習慣の相違はいろいろなトラブルを起こします。日本側の隊長や通訳の力量とソ連側の厳正な勤務のいかんが食糧の質量に大きなバラツキを生んだと思います。

炭坑での僕の仕事はハトロッコ押しです。注意しなくてはならないことは、電圧が二百ボルトで、坑道の天井を通る電線に頭が触ると大変です。防寒帽子を

被り、事故防止に努めます。トロッコは石炭が一トン入る鉄製です。下り坂でトロッコに乗り、頭が電線に触れ、電流が両手の指から流れ、指をなくし地面にたたきつけられた事故もあったのです。

僕はトロッコ押しを三カ月で電気機関車の運転手に昇格したが、二十一年の六月、機関車の脱線上げで右手を負傷して、ドイツ人の医師がいる第五ラゲルへ送られた。この医師の責任感の強さに感心したのです。新しい患者が入ると、夜でも患者の容態により何回も往診に来ます。感心していると、「君のときもそうだったよ」と隣の外人患者が教えてくれた。

出血している間は白パンで、栄養たっぷりの食事であった。手術のあと抜糸も済むと、十日間のここでの生活も終わり、僻地であるスパークスの病院に送られた。

#### \*病院での生活

病院生活でも、身体検査は月一回必ず行われる。これは労働のための等級付けである。一級は炭坑生活、二・三級は地上勤務、四級は病人扱い、軽作業。これ

を決定するのは若い女の医師のときが多い。全員丸裸で一列に並ぶ。順番が来ると右脚を台に上げる。女医師がへふくらはぎを引つ張る✓、次に後ろ向きになるとへお尻の皮を引つ張る✓、悪いところの問診があつて等級が決定される。

身体検査には必ず陰部の毛を剃っていくことが条件になる。これは毛ジラミの防止のためと言うが、逃亡防止も兼ねているようだ。

問診では、右手は親指、人さし指以外は負傷の後遺症で動かない。医師が触ると痛さをオーバーにした。

これは外人習慣を見習ったのである。それで軽作業の四級に格付けされ、夜間にジャガイモの皮むき、干し魚の骨取りなど、病院の食堂の下ごしらえが任務となり、一日おきに勤務した。日本人、ドイツ人、ルーマニア人などそれぞれの国が四人一組になり、一晚に二樽の馬鈴薯の皮をむく作業が一番多かった。日本、ドイツは規定量の仕事をするが、他はためである。ドイツ人に手伝いをしようとすると「これは自分の仕事だ、お前は休んでいなさい」と言う。責任者がある日「三

樽むけ」と言う。ドイツ人は「休みなしにむいて二樽が最高、それ以上はだめ」とはつきり断る。日本人は黙って引き受ける。いざむくと三樽は無理。どうしたかという、三樽目は粗相に上の方だけ丁寧なむいて納めた。病院の調理場である。役に立たない品物で責任者の怒ること、この上ない。上の人には八巻かれろVで、自分に責任を持つことができない欠点をさらけ出したと恥じ入るばかり。飛ばない飛行機もこんなことでつくられたと想像しました。

暇が多かったので碁石づくり。粘土で型をつくり、乾燥させペチカで焼くと白石ができる。それに石鹼を塗り、オガクズと一緒に缶に入れペチカで焼くと黒石ができる。碁盤は白布に線を引き、でき上がり。

スプーンづくり。木の匙で食べていたが、形のよいスプーンを見つけ、粘土で型をつくり、飯盒を溶かし型に流し込み、それででき上がり。

この碁石もスプーンも帰国で持ち帰ったが、昭和五十二年の家の改装でなくしたのは惜しい限りである。

身体検査の等級決定で、手の負傷もこれ以上よくな

らないからとラーゲル（収容所）に帰されることになった。半年の病院生活に別れを告げて、十一月の初め第九収容所に転属になった。

#### 第九収容所での地上勤務

身体検査は二〜三級なので、ここでは炭坑に入ることはなかった。地上勤務でいろいろな作業についた。冬の水道管理設作業の堀づくり。一晚で十五センチも凍る。それを鉄棒で穴をあけ、槌の原理を応用して凍った土を剝がしていく。それを上に上げるのが困難である。堀は深さ二メートルくらいまで下げるからだ。これも何日も続いたわけではない。

#### 地下倉庫の作業

野菜類は地下倉庫に保管されている。ペチカが焚かれて温度が適温に保たれている。その運搬作業の仕事につくと、赤いしまの入った蕪を生で噛ってもおいしい。それを失敬して食べると小便がしたくなり、雪の上になると氷水に赤い液体をかけたようになり、すぐばれる。

春先のほかばか陽気の野外作業は気持ちのよいもの

だ。鉄道線路の石ならし作業、たまに通る列車にはデ  
ッキにぶら下がるようにして乗ってくる人がいる。土  
手の下に退避するのでスカートの中は丸見えた。「三  
角の布を下げているだけだ」「物資がなくてブルマー  
がはけないのだろう」勝手な会話で時を過ごす。

### \*帰国

昭和二十二年五月末、ダモイ（帰国）の話が始め  
た。病気の人、労働力のない人、ハラシヨラボータ  
（優秀な労働者）、優れた民主主義者（共産主義者）  
たち、そうした人が早いなど、いろいろな噂がどこか  
らともなくまことしやかに話されていた。

実家では何の連絡もない、消息を確かめるあてもな  
い、半分あきらめ切っていたところに、前年に出した  
ハガキが春になり、昭和二十二年の帰国第一便で日本  
に送られたのでしよう。六月初め「元気でいます。心  
配ありません」この短いハガキが両親をどんなにか安  
心させたのでしょうか。母は「てんぼでもいい、びっこ  
でもいい、無事帰ってほしい」と喜びの話をしていた  
そうです。周囲の人は「その手紙がくれば、間もなく

帰ってくる人が多いそうだ」と勇気づけてくれるので、  
一安心して息子の帰りを一日千秋の思いで待っていた  
そうです。

そのハガキが着いたところ、私はカラガンダ地区の帰  
国第一便に選ばれ、病人を世話しながらナホトカ行の  
列車の人となりました。

注意されたことは、一、自分の氏名に近い呼び名と  
思ったら返事をして確かめよ、聞き逃すと帰れないぞ。  
二、ソ連で印刷したものは日本に持ち出せない。三、  
自分で書いたものも検閲を受けるおそれがある、怪し  
まれるものは持つな、であった。

舞鶴港に昭和二十二年七月二十四日無事上陸、検疫  
や事情調査を受け、日本のお金をもらい、外食券の必  
要なこと、「兵隊さん、ご苦労さん、荷物をお持ちい  
たしましょう、と親切らしく近寄り、ごっそり荷物を  
ネコババされることがあります。実家には料金先払い  
で電報を打ちなさい。郵便局では配達に全力を尽くし  
てくれます」とご指導を受けて帰還の旅につきました。  
港で「赤いりんご」の歌を迎えられ、緑の諧調に富

んだ山々、海の青さ。あー日本だ！この喜び、何ものにもかえられない貴重な経験です。

#### \*帰国後の生活

小学校の教師のまま応召したので、そのまま復職でき、恩給等も軍隊の期間も教職年数に通算され、不満はありません。

捕虜生活から心に決めたことは、

一、食物に文句を言わない。

二、短気を起こさない。

三、社会に奉仕しよう。

四、ソ連の理論と実際生活は余りに違う。

五、日本は日本らしい伝統と創造の面で働こう。

悔やまれることは、応召八カ月前に結婚した妻との関係が、両家の家族間のぎくしゃくに巻き込まれ破局を迎えたことである。このことは、新しい日本の家族や夫婦のあり方について深く考える機会となり、これを無にしない生き方をしようと決意している。今の所感は、余りにお金中心に生き、個人主義の悪い面だけがはびこり、よい意味での家族制度が崩れている。祖

先崇拜の信仰、皇室の尊厳護持、氏神信仰、お祭りの厳修などを忘れ去れば、日本の将来は暗いものになると思う。

終戦五十年、新しい国難を迎えようとしている。靖国の英霊に感謝の誠を捧げることをお誓いして、筆をとめます。

生年月日 大正七年二月二十日

本籍地 福島県郡山市三穂田町字館六番地

現住所 福島県郡山市三穂田町字館六の一番地

現職 郡山市三穂田町川田鎮座。宗教法人「白幡神社」宮司

#### 学歴

昭和五年三月二十五日 福島県安積郡豊田尋常小学校

#### 尋常科卒業

昭和十年三月七日 福島県立安積中学校卒業（五年

#### 制）

昭和十二年一月三十一日 尋常小学校本科正教員検定

#### に合格

昭和十五年三月一日 小学校正教員検定に合格

昭和十九年三月三日 福島師範学校研究科修了  
昭和三十二年八月十四日 神道講習会修了  
昭和三十三年十一月十九日 神職正階を受く

#### 職歴

昭和十一年四月八日 福島県安積郡豊田尋常高等小学  
校代用教員拝命

昭和十二年一月三十一日 同 訓導拝命

昭和十九年九月二十二日 召集令状を受け東部八八部

#### 隊に入営

昭和二十年四月二十日 甲種幹部候補生集合教育のため

満州奉天五四九部隊に転属

昭和二十二年七月二四日 ソ連カザフ共和国カラガン

ダより舞鶴に復員

昭和二十二年七月三十一日 福島県安積郡豊田尋常高

等小学校訓導に復職

昭和五十年十二月十九日 白幡神社宮司拝命

昭和五十二年三月三十一日 郡山市大槻小学校教諭退

#### 職

家業は白幡神社宮司。私で十八代になります。

家族構成 入隊当時は両親、妻、兄弟四人計七名の  
長男で、次男は東京在住中。

#### 【執筆者の紹介】

昭和十年三月、県立安積中学校卒業後、昭和十一年  
四月から教職員の道に入り、小学生の教育と青年学校  
生の指導に当たり、その間に教員検定に合格、福島師  
範学校研究科修了。昭和十九年九月召集令状を受け、  
相模原の通信隊に入隊。その後一週間にして満州に向  
け出発。十月中旬、第四軍第八通信隊第三大隊に配属  
になり、初年兵教育を受け、二十年四月、甲種幹部候  
補生に合格、奉天にて集合教育を受ける。教育途中で  
八月十五日の終戦を迎え、九月下旬原隊に戻り、十月  
四日、シベリアに第一歩をしるす。

その後長い列車の旅を経て、十月下旬、カラガンダ  
炭坑地帯のラーゲルに収容され、炭坑に勤務する。坑  
内では最初トロッコ押し作業であったが、そのうち電  
気機関車の運転手に昇格して、労働そのものは余り苦

労はしなかったが、食糧事情の悪いことと寒さには悩まされた。

二十一年の六月、機関車の脱線事故で手を負傷し、半年ほど入院。その後地上勤務になり比較的軽作業に従事した。

二十二年四月ごろから「ダモイ」話が持ち上がり、それが現実となり、七月下旬、帰国第一便にて懐しの日本に帰ることができた。

帰国後はもとの学校に教諭として復職でき、郡山市内の小学校を定年まで勤める。その間、代々続いた宮司の勉強をして神職正階になり、退職後は専ら神社経営と人権擁護委員として社会のため多大な貢献により数々の賞を受け、抑留で学んだ教訓を胸に活躍している。

(福島県 宗像 次男)

## 終戦、ソ連抑留に思う

兵庫県 田中 護朗

一、ソ連不法越境シ我が軍ト交戦中！

終戦当時、私は、満州西南部の承德に駐屯する第百八師団司令部付将校で、参謀部に勤務していた。

八月八日夕刻、「ソ軍ハ東北部国境ヨリ不法越境侵入シキタリ我が軍コレト交戦中」との方面軍司令部からの情報が部内に通達され、急に部内が騒々しくなった。私も何とはなくイライラしていた。参謀部の会議が再度開かれる。

二、敵の侵入を阻止せよ！の師団命令を

私は、翌九日早朝からモンゴル国境の林西陣地警備隊へ、師団命令下達、作戦、行動細部指示の任務を帯びて飛ぶことになった。この部隊は私が本年二月までいた隊で、兵員百五十で、当時としては装備もよく、士気も高いよい部隊だった。司令部から北西方向二百